【研究主題】　地域とともに未来を創る子どもの育成を目指して

【副題】　～コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）と地域学校協働活動の取組を活かして～

【学校・団体名】　滋賀県甲賀市立柏木小学校
【役職名・氏名】　校長　　近藤　秀幸

１　はじめに

本校は、甲賀市の西玄関に位置し、創立１３３年目を迎える歴史と伝統のある学校である。東西に走る旧東海道沿いに集落が並び田園地帯の中に集落が点在している。校区には、野洲川の肥沃な平野が広がり、農業が盛んである。近年は、北部の丘陵地帯に工業団地ができ、国道１号線沿いに大型商業施設が立ち並んできている。現在の児童数は、２２４名（通常学級８学級、特別支援学級４学級）の小規模校である。

この論文では、令和５年度から導入したコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）と地域学校協働活動の取組を活かして、地域の未来を担う子どもたちを、地域とともに育成していく実践について論述していく。

２　主題設定の理由

（１）本校の教育的課題

本校児童の全体的な特徴としては、いろんなことに素直に真面目に取り組むことができるが、生活面での体験不足や友だちとのコミュニケーション力の低下もあり、「自分で」「自分たちで」解決していく力、創り出していく力が弱い面がある。また、家庭状況等による不登校傾向や別室対応の児童も見られること、外国籍（ブラジル、ペルー、フィリピン、ネパール、中国、ベトナム）で日本語指導の必要な児童や児童の特性や育ちの過程から生活や学習に困難を示す児童が増えてきたことにより、個別に支援を必要とする割合が高い状況にある。

学習指導要領の改訂における視点の中で、今後、社会において求められる能力として、

・社会の激しい変化の中でも、何が重要かを「主体的に判断」できること
・多様な人々と「協働」していくことができること
・新たな価値を「創造」していくとともに、新たな問題の「発見・解決」につなげていくことができること

が挙げられており、本校児童にも必要な能力である。しかし、学校の取組だけでその能力は身につけられるものではなく、未来の柏木地域を担う子どもたちの育成を考えるとき、保護者や地域とともに思いを共有して取り組んでいくことが大切であると考えた。

（２）コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の導入へ

本校は、小規模であることから、地域の方々の学校への思いや支援体制、子どもの育成に対する姿勢は大変熱心であり、安全面や育成活動などに対して惜しみない支援がある。しかし、「仕組み」として機能していたわけではなかった。そのため、地域の子どもの育成のために地域と目標やビジョンを共有した連携の在り方について整理が必要となっていた。

滋賀県では、令和４年度の時点で 63.6%の公立小中学校がコミュニティ・スクール（以下、ＣＳ）を導入しており、県教育委員会主催の研修会等でもその目的・効果や成果を伝えられていた。

> 学校と地域住民等が、「どんな子どもに育ってほしいか」「子どもたちにどんな力をつけてほしいか」という目標やビジョンを共有し、社会総がかりでの教育、「社会に開かれた教育課程」の実現を図ることを目指しています。（滋賀県のリーフレットより）

まさに本校がこれから目指すべき学校経営の一つのツールとして、ＣＳの導入を進めるべきであると考えた。

甲賀市のＣＳは、令和４年度から小学校３校で初めて導入されたばかりで、教職員や保護者、地域にとっても、「ＣＳってどんなことをするのですか。」という状況であった。そこで、令和５年度の導入を目指して、仕組み、制度の理解のために、会議や説明会を行いながら導入に向けての準備を進めていった。

３　学校運営協議会の設置に至るまで

（１）ＣＳの理解のために

ＣＳは、学校運営協議会（以下、学運協）を設置した学校のことを指す。学校には、学校評議員が置かれており、学運協を設置するにあたり、学校評議員との整理が必要となる。学校評議員は「校長が必要に応じて学校運営に関して、保護者や地域の方々の意見を聞くことを目的とする」、学運協は「保護者や地域の方々が一定の権限をもって学校運営に参画することにより、『目標やビジョン』を共有して、社会総がかりで子どもたちの健全育成や学校運営の改善に取り組むことを目的とする」ものである。

国や県が、学校評議員から学運協への役割の移行を薦めているように、本校でも学校評議員から学運協への移行を進めることとした。学校評議員の会議での説明と協議、役員候補者による事務局会、設置準備会を行い、地域では区長会と自治振興会で説明を行った。設置準備会では、研修も兼ねて先にＣＳを導入した市内小学校長にしくみや取組を説明してもらい、導入への参考とした。

説明会や準備会の中では、次のような意見があった。

・「これからの時代に必要なしくみであることはわかる」
・「新しい組織を立ち上げることにより、新たなメンバーや会議・活動が、地域や保護者にとって負担にならないようにするべき」
・「学校と地域の協働ということは、学校の先生方も地域の行事などに参加してくれるのか」
・「理念はわかるが、具体的に何をするのか」

本学区では、子どもの健全育成のためにたくさんの組織が関わり、事業等を企画・運営されているので、新たな組織づくりへの疑問や意見を踏まえた組織にしていくこと、そして、昨今の課題として出ている教職員の働き方改革にもつながっていくことを確認しながら準備を進めていった。

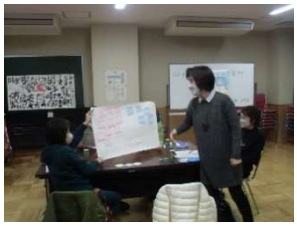
（２）組織づくりと目標

学運協の組織は、これからの社会を創っていく子どもの育成に関わり、様々な立場から議論することのできる方々に委員として参画していただくことを準備事務局会の中で検討した。

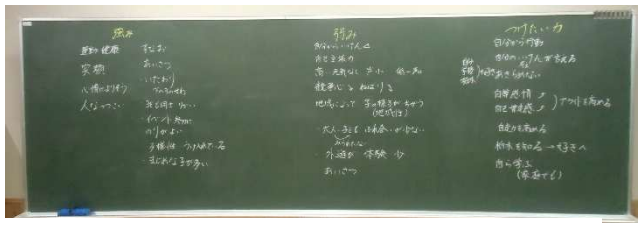
会長には、元中学校長で学区青少年育成会会長、副会長には元ＰＴＡ会長経験者でＮＰＯ法人レインボークラブ（総合型地域スポーツクラブ）事務局長に依頼し、地域とのつながりの中心となる地域学校協働活動推進員（以下、推進員）には、元行政職員、元教員の２名に依頼した。この４名を事務局員として、必要な他の委員の人選も行い、１３名の委員で学運協を構成することとした。他の委員は、次のとおりである。

・自治振興会副会長　・民生委員児童委員地区長
・子ども食堂代表　・教育後援会会長（区長代表）
・スポーツ少年団会長　・地域赤十字奉仕団代表
・おうみ通学路アドバイザー　・ＰＴＡ会長

そして、準備会では、委員候補が集まり本校児童の「強み」「弱み」「つけたい力」をグループ協議（ＫＪ法）の中で出し合い、目標を決定していった。

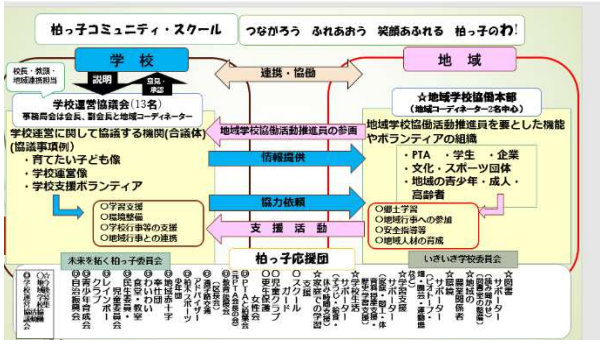


▲準備委員会での協議の様子



▲子どもの「強み」「弱み」「つけたい力」の整理

目標「つながろう　ふれあおう
　　笑顔あふれる　柏っ子のわ！」



▲柏っ子コミュニティ・スクールの構想図

４　ＣＳ導入後の活動

（１）３年間の見通し

学校経営目標とともに、ＣＳの目標に沿いながら、ＣＳとして、どんなことに取り組んでいくのか、目指す子ども像にどのような具体的な活動によって向かっていくのかを、３年間の見通しをもって進めていくことが第１回協議会の中で承認された。

まず、１年目は、ＣＳの周知、委員や推進員の役割理

解、地域と学校・地域と子どもが「つながる」ための柏っ子サポーター（学習支援ボランティア）募集と支援活動を開始すること。

２年目は、引き続いてＣＳの周知、「ふれあう」ための年間を通したサポーター活動、カリキュラムと関連付けた地域との協働活動の整理を行うこと。

３年目は、委員の改選、組織、活動の振り返りと見直しを行っていく計画とした。

決して焦ることなく、子どもの実態を見つめながら進めることを共通理解した。

（２）地域学校協働本部の立ち上げ

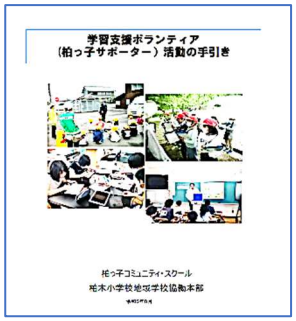
令和４年度は、ＣＳの導入（学運協の設置）に向けた準備のみに終始していたため、地域学校協働本部の立ち上げ準備までできていなかった。学運協は、協議体・合議体であり、学運協で熟議・議論された活動を実現するには、実働体の地域学校協働本部が必要である。まずは、学運協の事務局（会長、副会長、推進員）が本部役員も兼ねることにより、学運協で協議されたことを協働活動にスムーズに反映したいと考えた。

サポーターの募集は、６月中旬から保護者と区長会を通じた各戸への募集チラシ配布によって開始した。サポーターの活動としては、大きく５つの内容で登録を呼びかけた。

Ａ 教科支援　　Ｂ 環境支援　　Ｃ 地域学習支援
Ｄ 行事支援　　Ｅ 学校生活支援

８月の第１回サポーター会議までに２５名が登録され、９月から活動を開始することができた。（令和５年度末では３１名）登録者が増えたことには、２名の推進員の地域でのつながりと声掛けが大変大きいものであった。

（３）柏っ子サポーターの具体的な活動



サポーターへの登録者には、学校や子どもへの支援活動が初めての方も多く、子どもとの接し方や学校で知り得た情報には守秘義務があること等、共通理解が必要であった。そのため、企業・ＮＰＯ・団体等が学校支援をするための手引きとして県教委生涯学習課が作成している「学校からのメッセージ」を参考に、柏木小版「学習支援ボランティア（柏っ子サポーター）活動の手引き」を作成し、活動の趣旨や活動内容、学校の１日の流れ、守秘義務等、活動に際しての注意事項を第１回サポーター会議の中で共通理解を図った。

▲第１回サポーター会議

令和５年度のサポーター活動内容は次のとおりである。

・草引き・草刈り　　・運動会後片付け
・２年生九九暗唱聞き取り補助（昼休み）
・サツマイモ堀り補助　・交通安全教室補助
・調理実習補助　　・持久走大会コース見守り
・校舎回り庭木剪定　　・生活科学習補助（たこあげ）

計４０日間で、のべ１２１名が参加した。

▲サツマイモ苗植え

▲九九暗唱聞き取り

▲調理実習補助

▲校舎周り庭木剪定

（４）つながりによる子ども・地域・教職員の変容

推進員が作成・発行する「ＣＳだより」で学運協会長は、次のように述べている。

> もともと、柏木学区は各種団体のまとまりやつながりが強く、学校への協力も非常に大事にする地域でした。しかし、こんな学校にしてほしい、なってほしい、こんな子どもたちを育ててほしいなどの意見や思いを直接学校に届け、協議する場はありませんでした。そんなことからもコミュニティ・スクールが立ち上がった意味は大変大きいものがあると言えます。

支援活動後の児童の感想や作文では、

・（調理実習の後で）たくさんのアドバイスをもらったおかげできれいにおいしく作ることができました。教えてもらったことは今度もいかしていきたいと思

っています。
・(九九暗唱聞き取りの後で) ３のだんのくだりをやろうとしてもじしんがありませんでした。そのときスペシャル先生が「〇〇くんやったらできる」といってもらってやったらできました。とてもうれしかったです。

と、地域の多くの方とのつながり、見守ってもらっている安心感、体験や活動の支援によってできたことが達成感と自信につながっていることが伺える。

また、活動に参加したサポーターの感想では、
・学校がより身近に感じられるようになった。
・最初は不安でしたが、子どもたちや先生方と触れ合えて、とても嬉しかったです。
・とてもよい経験でした。これからも続けていきたいです。

と、学校や子どもとのつながりができたことによって、やりがいを感じておられることがわかる。

そして、教職員の学校評価では、
・地域の方々に様々な行事や学習で協力いただき、子どもたちの学びがより充実したと感じました。
・ＣＳとなってよかったと思えることがたくさんありました。取り組みで見せる子どもやボランティアの表情がとても穏やかでうれしい気持ちになりました。
・ＣＳに関わる方々に本当に助けられている。

と、教育活動の充実とともに業務負担の軽減にもつながっていると感じていることも大きな成果であった。

（５）学運協での熟議から

毎回の学運協の議題には、学校や子どもの様子、サポーター活動の報告がある。会議の中の報告だけでは、具体的な子どもの様子や教職員の思いを共有することはできないと考え、次の機会を設定した。

①学習参観日に学運協を設定し、参観後に感想や子どもにつけたい力等について意見を出し合った。
②学校行事や保護者参観の案内を委員にも配布し、いろんな子どもの様子を見てもらうことができるようにした。
③教職員全員と委員の合同会議を設定し、子どもの現状、地域の現状、子どもにつけたい力等について語り合った。

令和５年度の熟議の中で、次年度へ向けての活動の改善点として、
・「つながろう」から「ふれあおう」へ発展していくための活動を創る。
・未来の柏木を担う子どもを育成するために、柏木を知り、愛することのできる機会や学習を大切にする。

▲学運協委員と教職員合同会議の様子

の２点が出され、令和６年度の具体的な取組として検討し、令和６年度から年間計画や学習活動に組み入れることとした。

「ふれあおう」の活動としては、月１回昼休みにサポーターとのふれあいタイムを設定し、５月と６月に昔遊び、７月に風鈴づくりを実施した。子どもたちはサポーターと触れ合いながら、遊びやモノづくりを体験できることを楽しみにして、毎回約７０名の参加者がある企画となった。

また、柏木を知り、愛することにつなげる学習機会として、３年生の総合的な学習（「ホタルをビオトープに呼び込もう」）で、地域でホタルの水辺づくりに取り組んでこられたサポーターの２人を講師として招いた。ホタルの生態や地域での活動について教えていただき、子どもたちの学習と地域の環境保全の取組がつながり、故郷への興味関心をさらに引き出す機会となった。他学年の学習にも学運協委員やサポーターとともに柏木を学ぶ「ふるさと学」を取り入れていく予定である。

▲ふれあいタイム

▲総合的な学習講師

５　おわりに

２年目に入った本校の取り組みを振り返るとき、滋賀県の元ＣＳアドバイザー高木和久氏が講演会で話されていたことが思い浮かぶ。

・地域の協力が学校支援にとどまっていないか。
・人が入れ替わっても持続可能な仕組みか。
・未来の子ども像や地域像を見据えた取組か。

まだまだ緒に就いたばかりのＣＳ・地域学校協働活動である。目標や方向を常に「熟議」で振り返りながら、一歩ずつ取組を進めることで「地域とともに未来を創る子どもの育成」を目指していきたい。